
long and deep X'mas

あいぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

long and deep X-mas

【Zコード】

Z0757D

【作者名】

あいぽ

【あらすじ】

幼少の頃の記憶を失った一ノ瀬由佳里は、今年のクリスマスイヴに拳銃を控え幸せな日々を過ごしていた。しかし、由佳里の前に謎の男直哉が現われ……！？あいぽ初挑戦の本格ミステリー小説！！12月24日に全ての謎は解け『愛の奇跡』が世界を包む！？

序幕

愛は風を見つめながら揺るがせ
いつまでもしつかりと立ち続ける燈台なのである

シェイクスピア
『ソネット集』より

1997年

12月24日

『なあ由佳里……。小さな恋のメロディって映画知ってる……？』

揺れるキャンドルの灯火が、まるで幻想的に一人を包み込んでいる部屋で、まだ中学生ほどの幼き男の子と女の子が、クリスマスに愛を誓いあつていた。

その部屋は、女の子の方の部屋らしく、辺りには可愛らしいヌイグルミが飾られていた。

小さな恋のメロディー！？

女の子は、不思議そうに男の子に問うた。

『うん。 その映画ってさあ… 小学生くらいの男の子と女の子の恋の話なんだけどね…… オレすっげえ感動したシーンがあるんだあ…』

どんなシーン！？

『ある日一人は、【50年間妻を愛した】って墓碑に彫つてあるのを見つけて読むんだ…。』

『そしたら女の子が方がさあ……、50年も愛せるのかしらー？』
『て男の子に聞くんだ。』

『わよ……そんなに愛せる訳ないわ……。』

女の子は無邪気に笑っていた。

『…………』

『でもな……まだ幼ない男の子は自信に満ちた表情で、その女の子に聞つんだ。キミなり愛せるよってね。』

『…………』

『なあ由佳里……。オレも……由佳里なり……50年先もきっと愛してゐつて自信もつて言える。』

『約束するよ……。50年先のクリスマスも、こうやつて一人でこのメロディに包まれている事を……。』

『メリークリスマス』

男の子は、ポケットから、そっとオルゴールを取りだし開いた。

ビージーズの『若葉の頃』が纖細なオルゴールの音となり、幼き二人の恋を優しく包み込んだ。

急に、二人の幸せな時間を邪魔するかのように、女の子の母や父がいる1階のリビングからもの凄い音が聞こえてきた。

驚いた一人は、リビングの部屋の様子を見に行こうと、自分たちがいた部屋の扉を開けた瞬間身動きができなくなつた。

！！！

なんと下のリビングは、燃え盛る火の海となつてているのだ。

家の柱は、真っ赤に染まつた炎を吹き出して、物凄い音を立てて崩れてゆく。

イヤアアアアアアー！！

悲痛にも似た少女の悲鳴も、炎により崩れ落ちるそこいらじゅうの壁や柱によつてかき消される。

幼き一人は、迫りくる炎から逃れるため、玄関へ一気に走り抜けようど、二人で手を強く握り合いリビングを見下ろした時だつた。

メキメキと嫌な音を立てながら、周りの物を燃やし続ける炎の中に、不気味にカメラを握りしめた一人の男が立つてゐる影が見えた。

long and deep

X'mas

詞 川嶋あい

長い長い夜が来たね

街はイルミネーション

紺色の空に照らされた

幾つもの願いたちよ

舞い降りる天使のように

そつと冬が輝く

恋人たちは灯火を

待ちわびて帰らない

白い雪が告げる一夜

どんな奇跡が訪れる?

ベルの音が鳴り響く街に

君の瞳は七色で

そつと揺れるよ

思い出のキャンドルライト

いつか夢見た

2人だけの世界は

long and deep X-mas

どうかもう少し

昇らないで朝日よ

long and deep X,
and white X,
mass

序幕（後書き）

こんにちわ
あいぽです

さあいよいよ始まりました『クリノベ2007』

この物語は、あいぽ初の本格ミステリーへの挑戦です！！

読み進めて行く程に、主人公の由佳里の周りに様々な登場人物現れて謎が交錯してゆきます。

全ての謎は、12月24日に解けるのですが、物語の謎を解くヒントは、あいぽが大好きな川嶋あいさんの『long and deep X-mas』の歌詞に隠されています。

なんとこの歌詞の全てが、実は……！？（笑）

12月24日クリスマスイヴまで、是非是非お付き合いの程をヨロシクお願いします

第一幕 車イスのシンデレラ

2007年

11月20日

品川プリンスホテル

鳳凰の間 控室

「……ねえ…透さん。記者会見だなんて、やっぱ私緊張するよ…。」

シャンティリアの田映い光に包まれた隣の部屋とは違い、殺風景な控室で、20歳くらいの車イスの女性が、先ほどから落ち着きなく少し震えていた。

「なあ～」。すぐ終わる由佳里。君は、僕の横でじっとしていればいい。」

震える車イスの女性の肩に、両手をポンッとして、先ほど透と呼ばれた男は優しくささやいた。

車イスの女性の名前は、一ノ瀬由佳里。
そして男の名前は、朝比奈透。

幼少の頃から、ずっと付き合ってきた二人は、今年の12月24日のクリスマスイヴに、晴れて挙式を上げる事になっていた。

しかし、このカップルは、どこでモードブレーカー普通の挙式を控えたカップルとは訳が違っていた。

なぜならば、透の父である朝比奈憲三は、司法官庁つまりは検察庁の中でも、非常に有能かつ、メディアなどにも取り上げられるほど有名な検事であった。

朝比奈 憲三

彼の手にかかれば、どんなに小さな調書からも『有罪判決』へと導く、まさに悪を漏らさず正義を貫く検事であった。

また、息子である朝比奈透も、父と同じ道を歩き、弱冠25歳にして検事を勤めており、あの朝比奈憲三の息子といつ事もあり、検察庁では『若きプリンス』と期待されていた。

つまりは

あの朝比奈 憲二の息子である、この『若きプリンス』が結婚するという話題は、マスコミたちの格好のネタとなり、記者会見まで開く運びとなつたのだ。

しかも

この『若きプリンス』と、婚約者の一ノ瀬 由佳里は、一種の因縁めいた関係すらもあつた。

透と由佳里は、同じ中学校で、サッカー部に所属しており、そこでキャプテンをしていた透は、3つ下のマネージャーの由佳里にずっと恋心を抱いていた。

また、透の父、朝比奈憲二が扱つた事件で、『世田谷の放火殺人事件』という事件があつた。

今からさかのぼる事10年前の
クリスマスイヴ

世田谷に住む、ある一家の家屋が放火により全焼した。それにより、そこに住む夫婦は焼死。

その夫婦のひとり娘だけは奇跡的に助かっただが、当時まだわずか1歳だったその少女は、この大火によりPTSD（心的外傷後ストレス）を起こし、それまでの記憶を全て失ない、精神的障害からか両足が動かなくなり、車イスでの生活を余儀なくされてしまったのだ。

そして

その少女こそが、透の婚約者の一ノ瀬 由佳里なのだ。

そもそも、この由佳里という少女は非常に不幸な生い立ちを背負っていた。

由佳里が生まれたのは富山県の射水郡という場所だったが、由佳里の実の両親は、由佳里が生まれからすぐに失踪してしまった。

その後、由佳里は富山にある孤児院で育てられたが、10歳の時にそこの中長先生の紹介で東京に住む一ノ瀬家に養女として引き取られた。

しかし

この『世田谷の放火殺人事件』により、由佳里は一ノ瀬の父と母も失つてしまい、記憶喪失と両足の不自由という障害に加え、天涯孤獨にもなってしまったのだ。

だが……

不幸中の幸いとはこの事だろうか！？

なんと、由佳里を引き取る事に、朝比奈 憲三が名乗りを挙げたのであった。

当時、憲三は由佳里という少女に対して一種の運命的なものも感じていたのだ。

実は、憲三が担当した『世田谷の放火殺人事件』は、一時は迷宮入りしかけていた。

出火場所が非常に奇妙だった事と、犯行があまりにも衝動的だったと思われたため、犯人の手がかりを全く掴む事ができなかつた。万策尽きた憲三は、とにかく何か手がかりになる事はないかと、入院中の由佳里を献身的に見舞つていた。すると、ある日の事、記憶を失つたはずの由佳里が、犯人をしつかりと覚えていると、憲三に目撃証言をしたのだ。

これが事件の解決の糸口になつた。

結果、憲三は、解決困難だと思われていたこの事件で、由佳里の証言により容疑者を導き出し、見事に有罪判決を勝ち取る事ができた。

つまり、由佳里は朝比奈家にとつて、透が恋する女の子であり、憲三が恩を感じる女の子でもあり、とても大切な大切な存在であった。

そのような事から、由佳里は、不幸な生い立ちを背負いながらも、朝比奈家で憲三と透の深い愛情に包まれ育てられ、ついには今年のクリスマスに、透と挙式を上げる事にまでなつたのだ。

「…………やうやう。時間かな……。透…由佳里くん…準備はいいかな!？」

憲二は、腕時計に手をやつたあと、透と由佳里に優しく微笑んだ。

本日の記者会見は、透と由佳里だけではなく、憲二も出席する事になっていた。

「…………大丈夫だ。由佳里。安心して。」

先ほどから、ずっと緊張している由佳里の頭を、透はポンとおどけて叩いた。

「…………透さん……」

「ははっ。やつと笑ってくれたね、由佳里。やつぱり由佳里は笑つてる顔が一番可愛いよ。」

由佳里は、透のその言葉に、少し照れながらも幸せそうに笑つてい

た。

「……私は、こんなに幸せでいいのかな……！？ねえ透さん……。過去の記憶もない…車イスのこんな私と結婚して、透さんのこれから的人生の足手まといにならない……！？」

「……ばか。何言ってんだよ由佳里！！君には過去がなくとも、これから一緒に一人で未来をつくればいいじゃないか！！それに僕は……」

透は、そつとしゃがみこんで、車イスの由佳里と目線を合わせ、真剣な眼差しを向けた。

「……むろん、君は覚えてないだろ？けど、実は君が記憶を失う前の10年前のクリスマスイヴに、君に告白をした。僕は中学の頃からずっと由佳里の事が大好きでたまらなかつたんだ。」

「……10年前のクリスマスイヴに……透さんが私に告白をした！」

「…………ああ。」

透の真剣な眼差しの中に、由佳里は、自分への溢れる愛を感じ、思わず涙がこぼれた。

「…………ありがとう。透さん。……私、今口ほど自分の記憶喪失を憎んだ事はないわ……。」

「どうしたんだよ由佳里、急に……!？」

「…………だって、10年前の透さんの告白……覚えておきたかったなあ……。その時、私は幸せだったでしょ。」

「…………」

由佳里の愛らしい涙に、透は胸の奥から由佳里を愛おしく感じじめゆつと抱きしめた。

透も由佳里も、これ以上ないほどの幸せだった。

透と由佳里の結婚に関して、マスコミは

『車イスのシンデレラ…若きプリンスと結婚』
と騒ぎたてていたが、あまりにも不幸だった由佳里の生い立ちを考えると、検事としての成功を将来有望視されている透との結婚は、まさにシンデレラストーリーだった。

.....しかし.....

シンデレラの靴は、あくまでもガラスに過ぎない。

ちよつとした事で.....

脆くも壊れてしまひ事を.....

この時には誰も

気付いていなかつた。

第一幕 阳の当たらない場所

「……ねえ直哉。なんだあんたセックスの時につもシャツ脱がないのー?」

セイは、まるで阳の当たる場所を避けているかのように、じょじょっとした無機質な部屋の中だつた。

先ほどセックスを終えたばかりの女は、ベッドの上に呪を組み不服そうにタバコをふかしていく。

部屋の片隅に唯一ある小さな窓から、少し差し込む朝の光も眩しいのか、その直哉と呼ばれる男は、女を無視してベッドから立ち上がりブラインドを閉める。

そして冷蔵庫からサンドイッチを取り出したかと思つと、器用に口にくわえながら、缶コーヒーを2本片手づつに持つ、ベッドに座る女に運んだ。

「飲めば……。」

一言だけ咳き、直哉はテレビのスイッチを入れた。

「いい加減にしてよ……いつもそう……あなたは私なんか愛してない……ねえ……直哉……私たち出逢つてもう3年でしょ……もっと笑つてよ……もっと喋つてよ……」

「…………」

「……私……あなたの全てを知りたいの……もひとつ自分を見せてよ……！私……あなたを誰よりも愛してるのよ……」

「…………」

ヒステリックに興奮する女とは真逆に、直哉は表情を一切変えずに、見えてるのか見えてないのか分からぬような力のない目で、テレビを見つめていた。

「ねえ……直哉……あなたの心には一体何があるの!? 何を見てるの…? ねえ……教えてよ…! 私……こんなに直哉を愛して

るのよ……。」

つこに女は泣きべすれ、テレビの前に座り込み蒼白く照り始めた直哉の背中にもたれかかる。

朝のワイヤードショーが繰り広げられていた。

『車イスのシンナー……お嬢さんプリンスと結婚……』

ワイドショーでは、朝比奈透と一ノ瀬由佳里の結婚記者会見を派手に報道していた。

!!!

さつきまで全く力を感じられなかつた直哉の田が、その報道を田にしたとたん……

一瞬鋭くなつたかと思つと少へん弱やついた。

「……結婚なんてブチ壊してやる……。」

何かに怒り…

何かに悲しんだよつた憂いの日が、次第に憎悪に満ちた眼差しに変わり、気付けは手に持っていたマーヒーの缶を握り潰していた。

「ははは…！ 直哉あなたナニ…？ そんな怖い顔してテレビ睨みつけてんのよ…！ テレビの中の幸せそうな一人と自分を比べて嫉妬でもしてんの…？」

「…………」

「朝比奈透つて言つたけ…その男…？ 将来を約束された検察庁のエリートらしいよ…！ どう考えたって、あたしらにはかなわない人生じやん…！ あんたは歌舞伎町の三流ホスト…そして私はしないデリヘル嬢…！ どうせこの先、あたしらは陽の当たる場所なんて歩けないんだから…！」

女は、直哉の首に華奢な腕を回して直哉をからかう。

「…………」

「ねえ…直哉…。もつとあたしを愛して…」

女は、そのまま直哉の耳元に顔を近づけ、そつと囁く。

「……悪い。沙織…。オレ…行かなきや…。」

直哉は、女の手を振り払い立ち上がったかと思つと、何かにとり憑かれたように、そそくさと着替えを始め出した。

その表情は、わざとまでの無表情だった直哉とはうつて変わり、まるで死に急ぐような緊迫した険しい表情だった。

「……ちゅッ…！　直哉あんたどに行くのよーー。」

沙織と呼ばれた女は、直哉の背中を追いかけようとするが、今までみた事のなかつた直哉の迫力に動けなくなってしまった。

直哉が家を出たあと扉が閉まる音が、無機質な空間に虚しく響いた。

何が起こつたか分からぬ沙織は、ただその部屋で呆然と独り立つすくむしかなかつた。

うす暗い部屋の中で、幸せそうな記者会見の模様を繰り広げるテレビだけが、蒼白く不気味な光を放つていた。

「品川プリンスホテルまで……！　忙しいで……」

自分のアパートを出た後、直哉はすぐにタクシーに飛び乗った。

車内に容赦なく差し込んでくる外の陽の光が眩しいのか、大きな帽子をさらに深くかぶり、小さく屈みこんだ。

直哉を乗せたタクシーは、バックミラーに怒りで爆発しそうな鋭く尖った直哉の目を映し、品川へ向かい静かに走り出した。

第一幕 阳の当たらない場所（後書き）

さあついに謎の男直哉が現れました！！

彼は一体……！？

次回直哉が由佳里に……！

「…………ちょっと近づいてこないで…… 大声出すわよ……」

直哉は両手をポケットに突っ込み、腰を屈めながら車イスの由佳里に田線を合わせじわじわと近づいてゆく。

第三幕 忍びよる影

お楽しみにーー！

第三幕 忍びゆる影

「ふ~やつと終わつたね。」

品川プリンスホテルに面しているカフェで、由佳里が晴れ晴れした笑顔を透に向けた。

「ははは。由佳里はホントに照れ屋なんだね。」

由佳里の無邪気な笑顔を見て、透は幸せそうに微笑んだ。

記者会見が終わった後、透と由佳里は、近くのカフェでランチを取つていた。

二人が食事をしているテーブルは外にあり、キラキラとした秋の日差しが、まわりの木々の緑を伝い木漏れ日となり美しく輝いていた。

「……まあ。由佳里の照れ屋は今に始まつた事じゃないけどね。」

「……そつか。私は10年前の放火事件のショックで幼少の頃の記憶を無くしてしまつたみたいだけど、透さんは……記憶をなくしてしまつ前の私も知つてゐるんだもんね。」

「まあ。知つてゐて言つても、君がこっち（東京）に来てからの中学校時代の事だけだけだよね……。」

「なるほど……。確かに私って小学生の頃は、富山の施設で育てられてたんですよ。」

「…………うん。君が生まれ育ったのは富山だよ。」

透は、由佳里にゆっくりと話し始めた。

「例の事件をきっかけに、一ノ瀬のご両親を亡くした君を、朝比奈家で引き取る事を決めた時……実は僕は、君が育つた施設に、父と一緒に一度ご挨拶に行つた事があつたんだよ……。その園長先生はね、確か熱心なクリスチヤンでね……とても真面目でまつすぐな方だったよ。」

「…………そうなんだ。」

由佳里は、自分の奇妙な運命を振り返つてしまつたのだろうか、少し寂しいそうな表情で透に微笑む。

「…………」

そして、寂しそうな由佳里の表情に気がついたのか、由佳里にとってデリケートな部分に思わずと言えども、触れてしまつた透は神妙な面持ちで由佳里を見つめる。

「ねえねえ。中学の頃の私ってどんな女の子だったのーー?」

そんな気がしない時間に、ペリオドを打つたのは由佳里だった。

愛する婚約者に気を遣わせまいと、由佳里は無邪気に笑いながらえて透に尋ねたのだ。

由佳里とは、そんな女性だつた。

自分がいくら辛い過去を持つていても、決してそれで周りに心配などはかけたくはなく、むしろそんな辛い過去も吹き飛ばすべく、常に笑顔を絶やすず、周囲に元気を与えて生きてきた。

きっと透も、そんな由佳里の健気さや前向きさが何よりも愛おしくたまらなかつたから、由佳里がどんなハンディを背負つっていても、ずっと由佳里を支えてきたのであらう。

「……そうだなあ。中学生の頃の君は、部員たちの面倒見がとてもよく、いつも笑っていて、僕たちサッカー部員たち全員の憧れだつたなあ。」

「きやはははは。……それでその憧れの女の子のハートは、10年前のクリスマスイヴに透さんに奪われた訳だ。」「……ばか。」

二人の笑い声は、昼下がりの木漏れ日で美しく煌めくオープンテラスに優しく響き、一人を幸せすぎるほどに包んでいた。

しかし

その幸せそうな時間を、怒りに満ちた目で見つめている眼差しが、周りの木々の中から怪しく光っている事に、一人は全く気付いていなかった。

「……由佳里。ちょっとタバコ買つてくるね。一人で大丈夫!!?」

「うん。平氣だよ。車イスだからって、甘くみないでよね~。」

由佳里はおどけながら、車イスを器用に右左と自分の身体のよう

操る。

「はははは。分かった。分かった。じゃあ、ちょっと行ってくるね。

」

「うん。行つてらっしゃい。」

由佳里は、小走りに駆けて行く透に、笑顔で手を振った。

さつきまで輝いていた日差しが、急に雲により遮られ、辺りを大きな陰で包み込んだ。

「…………少し寒くなつたかな……。」

由佳里は横に置いてあつたバックから、ストールを取り出し肩に掛けた。

「…………ねえ……。結婚するつてどんな気分！？」

！――！

まるで由佳里が一人になったのを見計らつたかのように、急に由佳里に問いかける男の声がした。

「…………だれ！？」

恐る恐る声がした方向へ顔を向けると、タイトな黒いスーツに身を

包み、大きな帽子を深くかぶった直哉が立っていた。

「ねえ教えてよ。結婚するつてどんな気分！？ 楽しい……！？」

「あなた……ダレよ！？」

由佳里は、急に現れた直哉に怯え、両手で車イスのタイヤを回し、後ずさりする。

しかし、そんな事おかまいなしに、直哉は両手をポケットに突っ込み、腰を屈めながら車イスの由佳里に目線を合わせじわじわと近づいてゆく。

「結婚するつてさあ…。今まで付き合つてきた男を裏切り、夫になる男にその身を捧げんだろう…！？」

「…………ちょっと近づいてこないで…！ 大声出すわよ…！」

「…………ねえ…。あんたも今まで何人もの男と付き合つてきたんだろ…！ その男たち裏切つて自分だけ幸せに結婚するつてどんな気分なんか教えてよ…！…」

「…………ふざけないで…！ わよっとあっち行きなさい…！」

直哉がいきなり、由佳里の肩を掴んだ時だつた……

「おー……何してお前ひ……」

タバコを買いに行つた透が、由佳里の前に不審な男がいる事に気づき声を張り上げ走ってきた。

「なあ……由佳里……絶対お彼らの結婚ブチ壊してやるからな……」

透が戻つて来たのに気づいた直哉は、由佳里の耳元でさう弦やくと走り去つて行つた。

「大丈夫か！？　由佳里！？」

透は由佳里を力いっぱい抱きしめる。

透の腕の中で、由佳里は小さく震えていた。

あのヒト……

……私の名前を知つていた！？

透の腕の中で、由佳里は言こといつのない恐怖に包まれていた。

第三幕 忍びゆる影（後書き）

こんばんわ
あいぽです

さあ今日は、由佳里の過去が少し明らかになりましたね。

また……

一体直哉とは……ー?

あてー!

次回ですが、いよいよ由佳里の過去が明らかかに……ー。

「どうしたー！由佳里ー！」

「透さん……。私は……私は一体……！？」

突然に記憶の断片のようなものが蘇った由佳里は、一瞬何が起つたのか分からなくなり、小さく震えていた。

お楽しみー！

第四幕 フラッシュバック

第四幕 フラッシュバック

「……少し落ち着いたか！？ 由佳里。」

「…………うん。」

その日の夜、朝比奈家に戻った透と由佳里は、昼間の出来事をリビングで考えていた。

「由佳里の名前を知ってる人間なんだつたら……もしかしたら中学の時の人間かもしれないなあ。」

「…………中学生の頃の！？」

「ああそうだ。君は中学ではかなりの人気者だつたんで、もしかしたら今日の僕らの記者会見を見て、やっかんで品川まで飛んで来たのかもしれない。」

透は中学生の頃の卒業アルバムを確認しようと、卒業文集などその頃のものがいっぱい詰まつた段ボール箱を倉庫から取り出し、両手で抱えリビングに歩いてきた。

「透さん……大丈夫！？ 重たそうよ……その箱。」

「バカにするなあ……。これでも昔はサッカー部で鍛えてたんだからな。はははは！」

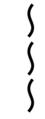
透はよろけながら、由佳里に笑いかける。

「…………あつ……」

ガツシャーン

やはり、その段ボールは重かったのが、ついに透は箱を落としてしまい、箱の中をリビングにぶちまけてしまった。

その時だった



その箱の中にオルゴールが入っていたらしく、突然オルゴールが音楽を奏で始めた。

！！！

……これは…？

由佳里は、ふとそのオルゴールの音に懐かしさを感じ、床に転がっていたオルゴールを広い上げる。

「……ねえ透さん…？」のオルゴール、透さんの…？」

「…………ん？　これは確かに……由佳里が記憶を失うきっかけになってしまった、10年前のあの事件の夜、君が助け出されて病院に運ばれた時にずっと大切そうに握りしめていたものだよ。」

「…………」

「私が、あの時の火事から助け出された時に、ずっと握りしめていたもの………？」

由佳里は懐かしそうにそのオルゴールの音色に耳を傾ける。オルゴールが奏でるビージーズの『若葉の頃』が、由佳里の身体を暖かく包み込んだ。

『約束するよ…………。50年先のクリスマスも、こりやつて一人でこのメロディに包まれている事を…………。』

急に由佳里の頭の中に見知らぬ男の子の声が聞こえてきたかと思つた……

次の瞬間

脳裏に、縁で溢れる山の景色が広がる。青空が広がり、草木が香るその場所の向こう側には何か博物館のような建物が見える。

そして、そこで無邪気に駆け回る幼き子供たちの声。

『ねえ……先生い。なんで子供は結婚できないの！？ オレ、由佳里の事大好きなんだよ』

『わうよ。わうよ。私も愛してるよ。』

先生と呼ばれる青年に話かけている幼い男の子と女の子。まだ小学生くらいの幼い由佳里が、男の子と手を繋ぎそのままの青年の前で無邪気に笑っていた。

.....

.....

「……由佳里……。おい由佳里……。どうしたんだよーー！」

！――！

「…………！？ 私は……」

オルゴールの音色に包まれた瞬間、突然失った記憶の断片がフラッシュバックした由佳里は、透の声で現実に呼び戻される。

「…………」

「どうしたーー由佳里ーー！」

「透さん……。私は……私は一体…………！？」

突然に記憶の断片のようなものが蘇った由佳里は、一瞬何が起こったのか分からなくなり、小さく震えていた。

「どうしたーー。どうしたんだよーー！　由佳里ーー！」

苦しそうに頭を抱え込む由佳里に驚いた透は、由佳里の瞳を見つめ必死に心配する。

「オルゴールの音色を聞いているつか、なんか懐かしい景色が頭に浮かんだの……。」

「懐かしい景色……！？」

「…………うふ。もしかしたら、失つたていた記憶の一部かもしけない……。」

「…………」

その言葉に一瞬驚いたように透は由佳里を見つめる。

「記憶が……戻ったのか……！？」

一言一言かみしめるように、透は由佳里に問いかける。

「…………いや。なんか一瞬だけ……遠い昔の自分を見た気がする。まだ小学生くらいの私……。」

「…………」

由佳里のその言葉に、透は少し考え込む。

「……なあ由佳里。由佳里は……自分が失った過去の記憶……やつぱり気になる?」

「…………うん。」

「…………」

「私は一体どんな風に生きていたのか…。そしてどんな人たちと関わりを持っていたのか、やっぱり気になるな。」

少し落ち着ついてきた由佳里はゆづくつとした口調で透に話した。

「だけどさあ…由佳里。僕たちはこれから、結婚して一人で未来を作っていくんだから、今までもいいんじゃない!?」由佳里にとつて大切なのは今までではなく、「これからなんじゃない!?

これから一人で作ってゆく未来。」

「…………だけど。だけど……透さん。私は…過去になんか大切なものを忘れて生きているのかもしれない!?!?」

「…………過去に忘れもの…?」

その言葉に、透の表情は少しこわばる。

過去の記憶を失つてからの由佳里の記憶にあるのは、透と過ごした

想い出だけだ。

しかし

もしも、由佳里が過去を思い出してしまったら……ー?

透は、自分の知らない由佳里の過去に少し嫉妬心を覚えた。

「過去なんて……いつかは時の流れに埋もれて消えてゆく……きっとや
んなものさ」

まるで過去へ引き寄せられてゆきそうな由佳里の手を、透はさつと
握り優しくせせらべ。

「なあ……由佳里。一人で素敵な未来を作つてゆけ。」

「二人で素敵な未来かあ。」

「ああ、一人に必要なのは未来だ。」

気が付けば、透は由佳里の手をしつかり握りしめながら由佳里を抱
きしめていた。

しかし……

一人の愛を少しづつ大きなものにしてゆこうとする朝比奈家を、ま
るで嘲笑うかのように外は秋の木枯らしが吹き荒れていた。

肌寒い秋の風が容赦なく吹きつける朝比奈家のリビングには、外から見ると暖かそうな明かりを放っている。

そして、容赦なく吹きつける秋風の中で、その明かりを物陰に隠れながらじっと見つめ続ける一人の男がいた。

「由佳里……。結婚なんて絶対許さねえから……」

直哉は、そう小さく呟いやぐと、木枯らしが吹き荒れる暗闇の中に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0757d/>

long and deep X'mas

2010年10月9日00時30分発行